

檸檬（前半部）

梶井基次郎

内容理解

この文章の前半部で、作者は、えたいの知れないものに苦しめられる自分の心と感覚を見つめ直し、救いを求めようとしている「私」を描いている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

◇えたいの知れない不吉な塊

・結果した肺尖カタル、神経衰弱、背を焼くような¹、そんなことよりも「いけない」もの。それは、酒を飲んだ後に宿酔があるように、酒を飲んでいと相当した時期にやってきて、私の心を始終抑えつける。

・例えば、蓄音器を聴かせてもらいに出かけて、二、三小節で不意に立ち上がってしまったくなる。何かが私を居たたまらずさせ、始終、街から街を²し続けていた。

◇みすばらしくて美しいもの

・風景にしても、壊れかかった街だとか、どこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転がしてあったりむぎくるしい部屋がのぞいていたりする裏通りが好きだった。風雨がむしばみやがて土に帰ってしまう、といった趣のある街で、土塀が崩れていた家並みが傾きかかっていたり、勢いがいいのは³だけで、時にびっくりさせるような向日葵やカンナが咲いていたりする。

〈私の錯覚〉

そこが京都ではなくて仙台や長崎に自分が来ているという錯覚を起こそうとする。誰一人知らないような市に行ってしまう。安静で、がらんとした旅館の一室、清浄な布団、⁴のいい蚊帳と糊のよききいた浴衣。そこで一ヶ月ほど何も思わず横になりたい。

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

焦燥（二〇〇・一）

安静（二〇一・五）

願わくは（二〇一・六）

察し（二〇二・三）

錯覚が成功し始めると、それへ⁵の絵の具を塗りつけ、錯覚と壊れ^くかかった街との二重写しの中に、⁶の私自身を見失うのを楽しんだ。……………

・花火が好きになった。安っぽい絵の具で、しま模様を持った花火の束。一つずつ輪になっていて箱に詰めてある。

・びいどろという色硝子^{ガラス}で鯛^{たい}や花を打ち出したおはじき、南京玉^{なんきんだま}が好きになった。それを口に入れて父母に叱られた、⁷記憶が大きくなってよみがえるせいなのか、あの味にはかすかな爽やかな何となく⁸といったような味覚が漂っている。

◆ぜいたく

・そんなものを見て、少しでも心の動きかけたときの私自身を慰めるためにはぜいたくということが必要だった。二銭や三銭のもの、といってぜいたくなもの、美しいものといって無気力な私の⁹にむしろこびてくるものが私を慰める。

・以前私が好きだった所は、丸善。洒落^{しゃれ}た切子細工や典雅な口ココ趣味の浮き模様を持った琥珀色^{こはく}や翡翠色^{ひすい}の香水瓶、煙管^{きせる}、小刀、石鹼^{せっけん}、煙草^{たばこ}を見て、そして結局一等いい鉛筆を一本買うくらい¹⁰のぜいたくをしたが、その頃の私にとっては重苦しい場所になり、学生、勘定台が、借金取りの亡霊のように見えた。

←……………心の不思議……………←

主 題

作品のこの前半部分で作者はどのようなことを描こうとしたと思われるか、次のことに着目して、百字程度でまとめてみよう。

〈着目点…「私」の好み〉

発 展

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

・京都の街並みには、どのような魅力があるか。

・「不吉」と感じるものには、どのようなものがあるか。

・さまざまな小売店の商品の並びには、どのような工夫がされているか。

100

檸檬（後半部）

梶井基次郎

内容理解

この文章の後半部で、作者は、自分自身の感覚を研ぎ澄まし、新しい思いつきに賭ける「私」を描いている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

◇果物屋（ある朝、何かに追い立てられ、街から街へ裏通りを歩き、とうとう二条の方へ寺町を下がり、その果物屋で足を止めた。）

・果物固有の美しさが最も¹ に感ぜられた。黒い漆塗りの板の、かなり勾配の急な台の上に果物が並べられている。華やかな美しい音楽の快速調の流^{アップレグロ}れが、見る人を石に化したというゴルゴンの鬼面——的なものを差しつけられ、あんな² やあんなボリュウムに凝り固まったというふう³に果物は並んでいる。青物も奥へゆくほどずたかく積まれていて、にんじんの葉の美しさはすばらしかった。

・美しいのは夜。周囲が真つ暗なため、店頭^{みせまぎ}の電灯が、ほし⁴いままに美しい眺めを照らし出す。 ³に立って、また鑑^{かん}屋^やの二階の硝子窓を透かして眺めたこの果物屋の眺めほど、その時々⁵の私を興がらせたものは寺町の中でもまれだった。

◇檸檬（いつになくその店で、その店では珍しい檸檬を一つ買う。）

・いったい私はあの檸檬が好きだ。レモンイエロウの絵の具のチューブから搾り出して固めたようなあの⁴ な色。あの丈の詰まった紡錘形の⁵ 。

〈私の幸福〉

心を抑えつけていた不吉な⁶ がそれを握った瞬間から緩んできて、街を歩く私は非常に幸福だった。しつこかった憂鬱が、そんなものの⁷ 一^{いっ}顆^かで紛らわされる——あるいは不審なことが、 な本当であった。心とは何という不思議なやつだろう。

心の不思議

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

空虚（二〇二・一五）

ほし⁴いまま（二〇四・一一）

いつになく（二〇四・一五）

逆説（二〇五・六）

・檸檬の冷たさは例えようもなくよかった。誰よりも熱い私の手のひらから身内にしみとおってゆくようなその冷たさは快いものだった。

・何度も何度もその果実を嗅いでみた。そして胸いっぱい匂やかな空気を吸い込めば、私の身体や顔に温かい血のほとぼりが昇り、身内に元気が目覚めてきた。

・あんな単純な冷覚や触覚や⁸ や視覚が、私にしつくりしたなんて不思議だ。

《私の諧謔》

つまりはこの重さなんだな。——この重さは全ての⁹ もの全ての美しいものを重量に換算した重さだと、ばかげたことを考えてみる。

◇丸善（どう歩いたか、丸善の前について、避けていた丸善に、「私」は入っていく。）

・幸福な感情はだんだん逃げていき、憂鬱が立て込めてくる。画集の棚に行き、重い画集を出して開けては次々に置いていく。私は¹⁰ になってしまつて、自分が積み上げた本の群を眺めていた。

《私の実験》

画集を積み上げて作った幻想的な城の城壁の頂に、檸檬を据えつけた。檸檬の色彩は冴えかえつて、周囲の空気だけ緊張していた。

《私の想像》

丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けてきた奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発する。

主題

この作品で作者はどのようなことを描こうとしたと思われるか、次のことに着目して、百字程度でまとめてみよう。
《着目点…檸檬の爆弾》

発展

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

・果実の美しさを歌った詩に、どのようなものがあるか。

・夜の街の美しい光景を題材とした絵画作品には、どのようなものがあるか。

・錯覚を扱った梶井基次郎のほかの作品には、どのようなものがあるか。

100